

淨土

二月號

白

椿

吉田絃二郎

行誡と容齋

結城素明

淨土教の本質

眞野正順

詩と宗教

新聞進一

冬の歌

若菜

春さめのふるの山田につみのこす

鈴菜すすしろ深みどりせり

餘寒水

花のひもとくべき風のふきかへて

またも氷をむすびつるかな

春雪埋松

うづもれぬ春の色とてあわ雪の

した枝の松のふかみどりなる

梅

梅のはなさかぬ垣ねぞなかりける

春は野末をゆくべかりけり

月前梅

さえかへる春のゆふべの月陰に

おぼろげならぬ梅が香ぞする

——行誠上人——

目次

浄土教の本質(二)	眞野正順(6)
詩と宗教	新聞進一(10)
行誠上人と宗教	結城素明(1)
白椿	吉田絃二郎(4)
或る日のナホトカ	村瀬秀雄(14)
遣送船	町田修(15)
珠數物語	後藤元祐(10)
讀者の聲	(15)
芝園だより	



行誠上人と容齋

結城素明

行誠上人の結縁録の中に「永島妙壽、其嫁高子、其娘門子みな厚志時々聞教の人なり、池田屋妙觀あかしや母子皆受戒の人也」と記されてあるが、この池田屋妙觀というのは私の祖父で、その當時本所石荒井町に酒屋を業としていた。この結縁録は上人にふかく結ばれた人々、徳本行者を初め七十餘名の姓名と、その行跡、結縁の次第などを、記し綴られたもので、私の祖父も日頃上人にふかく歸依して居つたことから、こうして記しとゞめられたものと思はれる。私が生れたのは、既に祖父の歿後であつたが、祖母はまだ健在していた。上人に歸信すること深かつた祖父母は、上人のお書きになつたものは心して機會のある毎に集めもし大切に家に傳え、私は父からその中の半ばを貰ひ受けたが、その中には祖父が上人から御袈裟を授與されたときの包紙の如きまで保存されてあつた。小奉書紙で、授與、御袈裟一領、庚午十二月佛成道會行誠と枯淡な墨色を遺している。この時のお袈裟は金襴の織物で、いまはその布地は、上人筆灌佛會圖の表装に用いてある。

(1)

先に引いた一文の中に、永島妙壽と見えるのも、私の家の縁者に當り、當時日本橋區兩國吉川町で砂糖商を營

み、一族一家こぞつて篤信の人たちであつたことは、この結縁録からも知られる。上人にふかく歸依していた祖父母のことを想ひ、又日頃座右に傳えられた上人遺墨の風韻に接することから、私もまたふかく上人を敬仰している。話が私の家のことに多くなつてきたが、こゝに結縁録の中に記されている畫家菊池容齋、彼が上人との交りの中から奇しく残すに至つた一つの畫業のことをこゝに綴つてみたい。

結縁録には二人の畫家のことがみえるが、それは「まき畫の名匠」柴田是真と、いまこゝに云ふ菊池容齋とである。

その條に一畫にては古に恥ざる人なり、就中人物に妙なり、前賢故實十卷を著はす、文辭も頗るありて、書も見ごととなり——今日の世には有がたき人なり——とあるが容齋にして若しも行誠上人と相遇ふことがなかつたならば、その不朽の名著「前賢故實」も或は刊行をみるに至らなかつたかも知れぬし、また上人にして若しも容齋と相識ることがなかつたならば、その護持供養の聖像五百羅漢の畫幅も或はこの畫人によつて製作されずに終つた

かも知れない。

容齋は寛政元年の生れで、本姓を河原、通稱を量平といふ。その家は代々幕府の先手與力をつとめ、彼も勤續廿四年に及んだが、日頃好む畫の道については既に十八の時から狩野派の畫家高田圓乗の門に入つて學び、三十八のとき職を辭してからには畫業に専念しひろく古大家の遺法を研究し諸派の流風を參酌して遂に畫人としての新生面を拓くに至つた人である。京坂の地に遊んで佛刹神祠の藏品について、その考證に足るものは廣く之を探り考證的知識も頗る豊かであつた。歴史畫は殊にその得意とする題材であり、古來の明君、賢相、烈士五百餘人の像を畫き、その小傳をも附した一前賢故實一十卷は、實に十七年の星霜を費し刻苦心血を注いだものであつた。しかしその清貧の生活からは之を自ら上梓することは思ひも及ばず、といつてこの多量な畫稿を引受けようとする書肆もなく、折角の辛苦の結晶も之を世に出すことが出来なかつた。年來深い交りの行誠上人の援けの手がさし出されたのはこの時である。

こんな話が傳えられている。その頃牛込に加藤金兵衛と云ふ商人があり、掌中の珠と慈しみ育てた一人娘を、さる方へ嫁がせたが若き妻となつたこの娘は哀れにも間もなく此の世のものではなくなつた。親の嘆きは一方ではなかつた。愛するうら若い妻を失つた夫の家では、在りし日の姿を想ひ起し歎きの種となるばかりだからと、婚禮の折に持參した調度衣服を里方に返したいと申し出

て來た、しかしいかに悲傷の種とはいえ、ひと度嫁入つた娘の道具を返されるのは、死したる者を離縁される様にて、草葉の陰での悲しみも亦ふかいに違ひない。引きとれぬ、いや是非に、と押問答の果が、親金兵衛の胸に浮んだのは、「いま深川におはす行誠上人は、淨土宗の大德、古今の名僧と聞いているが、この上人に全てを話せば、衆生濟生の便ともし給ひ、また亡き娘の往生の縁ともなるであらう」とゆうこと。それならばと相談決して形見の着物調度類を賣つて、時の金で一千兩、悲しみの中にも行誠上人の慈悲の膝下に之を捧げたのであつた。

かねて容齋の心中を知つていた上人は之を容齋に與えこゝに脱稿の後二十年にして一前賢故實一の出版は光明を得たと云ふ。年來の宿望漸く光を得た容齋は、この報恩の道も如何と、上人に尋ねたところ、「さらば五百羅漢の畫を描きて供養し給へ、亡者のため施主のため、如何ばかりなる功德ならん」と。

こうして深川本誓寺の什物五百羅漢圖など十五幅とゆう容齋の傑作が生れ出たのである。畫幅はのち兩國回向院に一釋迦文殊普賢一の中幅と十六弟子、十六羅漢の三幅が保存され菊池家にも畫稿の一部が傳はつていたが、之等は今度の戦争にも無事であつたらうか。

藤岡作太郎博士や笹川臨風博士の著書にもこの佛畫について、巷間傳えるこの話をとつていられるである。何しろ世人の敬仰厚い上人、畫壇の偉彩容齋といつた人物に關することから、話も傳聞の間に多少の潤飾が加わつ

たようである。容齋の遺族菊池祥郎氏の家に傳わる羅漢圖序の草稿などから察するに、加藤智勵（話の中の金兵衛との關係がはつきりしないが）とゆう者が、亡妻の衣服調度の品々を賣つた金で、追善のため執筆を依頼し、その揮毫料で前賢故實出版が出来る様になつたとゆうのが眞實に近い様である。その羅漢圖が本誓寺に納められたのには、加藤氏や容齋の行誡上人への歸依があらうしまた一容齋の爲にをりをり繪畫に益ある古經を擧げて垂示し、容齋またその教によりて多く佛事を作すべきものを一描いたと伝えられる行誡上人と容齋との關係がこの畫幅製作の裡にも深くこめられていたことは疑いないことである。ともあれ亡き人の形見をかくる作善の料にふりかえた市井の一商人のしみじみとした心情を廻つて、上人の導きと容齋の畫心とが描き出したこの話は佳話たるを失はない。

今日菊池家には、容齋遺愛の小屏風一雙が傳はり、容齋の知友四十二人の肖像と、傍らに各々其の人の書簡或は詩歌の類を貼付けてある。其の肖像畫は或は對談中に寫生して置いたといふやうなもの許りで、一隅に其の各々の名前を書入れてあるが、何れも容齋晩年の筆蹟である。此の屏風中に、短時間で寫したと思はれる素描の上人の肖像が肩に一行誡和尚一と書入れして貼付けてあるが、其の描線には企まない妙味があり、精采奕々たる上人の風貌を傳へている。此の像を見ても上人は一面情誼

の厚い人であつたことが窺はれ、容齋との間には肉親も及ばぬやうな深い交渉もあつたやうにも察せられる。

傳へるところに據れば、容齋の繼室時子は元増上寺御貸付方用人榊原左近右衛門の女で、寺の方の關係から上人が其の媒酌の勞を執つたものであるといふ。容齋の先妻太喜の歿したのは、天保九年、容齋五十一歳の時であつた、『前賢故實』の執筆を了へてから間もなくことである。時子と結婚の年代は明瞭でないが、嘉永五年奥書の容齋四男河原四郎の『親類書』中には、己に後妻の名が見えてゐるから、其の結婚は天保九年から嘉永五年までの間のことで、嘉永五年には容齋六十五歳である。恰も上人が容齋の爲『前賢故實』の上梓に力を添えていた頃また其の後妻を世話し家庭のことにまで心を配つていたことが推察せられる。ここに上人の慈悲心を見ると共に如何に容齋と相許した間柄であつたかゝ窺はれると思ふ。

前賢故實の刊行以來、容齋の名は實に一世を風靡したかの感がある。彼は明治十一年、九十一歳の高齢で物故したが、その八十一の時、永く家に傳えるために描いた土佐日記繪卷は、後に上人座右の篋中に收められるに至つてゐる。明治廿一年八十歳で示寂されるまでの晩年兩年の間、上人はこの繪卷を披見愛玩されて亡友追慕の至情をふかくされたことであらう。

佛心と畫心と、ふかく結ばれた交情を想うとき、いままほ、ほの／＼と心の溫かになるのを感じる。



白椿

吉田 絃二郎

今年の正月はいつになくあたゝかだつたせいか、庭のわびすけ椿も、例年にましてたくさんな花をつけてゐる。それを鶯が来て花をつゝくので、毎朝白い花片がかなり多く散つてゐる。赤い山椿の散り布いた姿は美しいが、白い椿のそれは寂しい。閑古をきはめてゐる。

この冬は裏庭の柚子もたくさんな實をつけた。いつもは冬至のころになれば、友人たちに配つてやるので、正月になれば木守りのたゞ一顆を残すだけであつたが、今年はまだ三四十顆を残してゐる。それが雪霜にいためられては、毎日落ちて行くのを見れば、妙に寂しい氣もする。

そはとまれ、冬の寒空にわづかに梢頭に取り遺された柚子の實を眺むるのはいゝものである。簡素枯淡の美である。

白椿にしても柚子の實にしても東洋的なよさである。

東洋的なよさであつて、恐らく西洋の人にはわからないよさである。美學上から言へば簡素シンプリシティの美であるがそして簡素といふことは西洋の人々にもわかるが、東洋的な枯淡となつて來るとやはり東洋は東洋である。

日本は領土を失つた。悲しいことである。しかし日本人が東洋的なもののよさを忘れようとしていることは更に悲しむべきことである。

この正月、床の間の飾りにと思つて、わたくしは如意と二枚の羽子板を並べて置いた。如意は鎌倉圓覺寺の名僧洪川禪師の物で、羽子板は市川左團次の「毛拔」と、これも同優の堀端の「丸橋忠彌」の似顔である。

「毛拔」の裏には左團次の筆で

追ひ羽根に人の不足や去年今年

と書かれ、「丸橋忠彌」には同じく

春雨やいたゞく笠も父の恩

と記されてある。二枚ともわたくしが歌舞伎座の樂屋へ持参して、左團次に書いてもらつたものである。

寒枯幽玄の禪洞と絢爛な大歌舞伎芝居の雰圍氣を一室に並べて味ふに何の矛盾不調和も感じないところに日本の春のよさがある。

元日や思へばさびし秋の暮

といふ芭蕉翁の句があるが、日本の春には羽子板の花やかな一面があると共に、その裏には秋の暮を墨繪で書いたものゝ感じが潜んでゐる。

東洋的なものゝ感じ方である。

人も見ぬ春や鏡のうらの梅

これも芭蕉翁の句であるが、春になれば殊に思ひ出さるゝ句である。蒼古たる手鏡の裏に打ち出された梅の花を聯想する。わたくしたちが子供時代には、煤けた簞笥の片隅に忘れられたやうにして、母や祖母たちが使つた青銅製の古鏡がころがつてゐたものである。鏡の裏には梅や秋草などが彫られてあつた。かつてはそれ等の鏡は女の魂として大切に切り扱はれたものであつた。さうい

つたことを思ひながら考へると芭蕉の句の味がしんみりと感じられて来る。

その尊い古鏡が、明治時代になると西洋風なガラスの鏡と取りかへられた。凸凹のはげしいひどい物であつたが、それでも當時の日本人は文明開化の象徴のやうにしてガラスの鏡を愛用した。今日の日本人にもこれに似た愚をくりかへしてゐる者がある。

李白の詩に

去歲何時君別^レ妾、

南園綠艸飛^ニ胡蝶、

今歲何時妾憶^レ君、

西山白雪暗^ニ秦雲、

玉關去^レ此三千里、

欲^{シテ}寄^ニ三音書^ヲ那得^レ聞^ク。

といふのがある。長安の都に一人ゐて遠征の夫を憶ふ妻の悲しみを歌つたものである。去年南園の綠草に蝶の飛ぶころに別れたが、今は西山に白雪つもり秦雲暗き季節となり、三千里外の戦場の消息を聞くすべもないといふ悲しみは今も昔も同じである。それにしても冬が近づくと毎にわれわれ日本國民の胸を打つものは、シベリヤからの船の連絡が絶えたといふ報告である。愛する人を待つ人々のかなしみを思へば日本の春はさびしい。

淨土教の本質 (第二講)

——宗教の二本建て——

眞 野 正 順

さて、これから、淨土教の考察にとりかかるに當つてまづ、はじめに一つ是非、頭の中に入れておいて戴きたい事がある。それは、すべて高級なる宗教は二重建ての構造になつておるといふ事である。

二重建といふのは、信仰と教理のことである。すべて發達した宗教は、その獨特なる信仰と共に、その信仰の理論すなわち教理を具えておる。宗教が高級になればなるだけ、その教理も發達しておるもので、佛教は特に、この教理の高遠なることにおいて無比の特長とすると云はれるのは周知のごとくである。

ところが、この二つは、本來から云へばたがいに、一致すべきものであるが、必ずしもそうなつておらない。教理は信仰を裏づける理論であるから、當然いつも信仰と一致しておるべきもの、また、そうでなくてはならぬ筈であるが、皮肉なことには、これがどうも喰ひ違ふ。信仰を基礎づけるべき教理でありながら、ややもすると

あべこべに、信仰に背いてゆく。

(學生骨になりて、念佛や失はれんずらん 法 然)

ここに問題が起つてくるのである。

これは、一方は體驗であり、一方は理論であるから、つまりは、畑のちがふところから來るのであるが、それならば、いつそ、教理などは打ち捨ててしまへばよいかといふに、信仰を正しく維持してゆくためには、その正確な理論は是非とも必要缺くべからざるものである。そこで、喰ひ違ひながらも、これを以て、信仰をもち立てて行かねばならぬ。これが、宗教なるものの持つてゐる一の皮肉な運命である。それで、あらゆる宗教は、信仰と教理との二重建の構造になつてゐる。淨土教が、佛教の傍流と誤解せらるる原因は、そもそもここらあたりに伏在するのである。この事をもちし述べよう。

宗教の中心をなすものは、もとよりその信仰である。信仰が死んでしまつては、いかに立派な教理や組織があ

つても、主なき空家である。

ところが、この信仰といふものは、いはゆる直接體驗の境地であつて、それを、そのまま人に移し、同じやうな確信を生ぜしめることは、なかなか困難である。それを人に傳へるには、個人的な體驗の世界から出て、自分も他人も同様にうなづきうる共同の世界——すなわち、理知の世界に出てこねばならぬ。即ち、信仰が理知によつて裏附けられた時に、はじめて、萬人の近づきうるところのものとなるのである。

このやうに、教理は、信仰に一般性をあたえ、理論的な基礎づけをする。いはば、信仰を「公路」において支持する。教理は、けつして、信仰に代ることはできないが、しかし、その正確な客觀性によつて、宗教信仰をその奥所にいたるまで指示する役目は果し得る。

理論は、このやうに、共同の世界において信仰のすがたを現すものであるが、一方理知は誰れにも通ずるものだけに、それだけ、平面的なもので、そこで取扱つてゐる内に、生きた宗教的體驗の獨自なる特色を喪失してしまふおそれがある。

たとへて言ふと、教理は信仰の經驗のない者の手をひいて、宗教の門まで案内してくることは出来るが、内に

入ることはできない。

門のところで立止つてしまふ。そこで、教理は「これまで」とお辭儀をして姿を消してしまへばよいが、いつ迄も、客の袖をつかんで離さないと、客は門の内に入らず、そこらあたり往來だけを見廻して、それで、その家の中に入つたやうな氣になる。教理には、かういふ缺點がある。

つまり、宗教をその眞の意味に達せしめずして、平面的な一般的理知の世界に導き、その中に宗教を解消してしまふのである。

教理は、いつも、いかめしい理論の複雑さと難解さをもつてゐる。これは、もともと理論では現しがたい信仰の境地を、無理やりに理論で組立てようとする所から起つてくることであるが、それだけ、また、いかにも奥ぶかく山緒ありげに見えるので、骨を折つてそれを理解すれば、信仰の極致はマスターできるもののやうに感ぜられる、——ここに錯覺の一つの原因がある。——しかし、これだけでは實は信仰の平面化、つまり常識化にすぎないのである。

それならば、信仰は教理を離れて、ただ獨り立ちしてゐられるのであるか。

もとより、宗教の本質をなすものは教理ではない、信仰である。宗教の宗教たる真髓は、ただ信仰の世界においてのみ現はれる。それは、人間の中心生命の直接的通路であつて、理性の樊籠を脱し、それみづから独自の境地をひらいておる。ここにおいて、宗教はのびのびと自らの特長をほしいままにし、宗教の成長發展も、ただこの境地からのみ生れてくる。宗教發展の主導的位置にあるもの、いはば宗教の生命である。

しかし、それは、今云つた直接體驗の世界であつて、世俗的理性を越へたものであるからして、ただ、そのみを現そうとすると、世俗的常識を超えたものとして、結局、この世俗世界を無視し、なにか、この世を超えたものの中に入つてゆくもののやうな風になり、この世界を虚無と見て捨て去るか、或は、超世間的なものの中に逃避するかのやうになつてしまふ恐れがある。佛教が一面この世の一切を迷妄とする單なる虚無主義であるかの如く見られるのはこのためである。

それのみでなく、信仰は人間の中心生命の直接の發動であるから、これが積極的に働きだした場合、そのままに放置すれば、時々情熱的に傾いて、あるいは、沸騰の極、奔放極端なる幻想境に突入したり、あるいは、忽ち頹落して淺ましい原始信仰の迷信へと變貌したりするところがある。

それゆえ、宗教信仰が、たえず陥らんとする奔逸と頹落とをふせいで、常に正しき路にあつて進むためには、冷厳正確なる理知によつて、絶えず、これが骨ばりされ裏づけられてゆかねばならぬ。即ちやゝもすれば、超世界的に翔らんとする信仰の世界を、現實理知の枠の中にひきよせ、その上に張りつめてゆく事によつて、現實を指導してゆくのでなくてはならぬ。すなわち、信仰が現實の上に實現されてゆくのでなければならぬ。これを、信仰の中に現實を取入れること——佛教では、後得智と名けるのである。

これが、すなわち、教理のもつ他の一面である。

このやうに、信仰と教理とは、宗教にとつて缺くべからざる双翼である。それは、互に他に代ることのできぬのみならず、並に相尅するものでありながら、然も、いづれか他の一方を缺いて、正しき宗教を成立せしめる事はできない。永遠にたがいに一致する時無くして、しかも、常にあい提携してゆかねばならぬ。こゝに、宗教の二重建の理由が存するのである。

あらゆる宗教の歴史は、ことごとく、この兩者のはてしなき葛藤の歴史と見ることが出来る（試みに基督教を歴史の一部を緋け）佛教もまたこの運命から脱する事はできなかった。いな、むしろ、佛教は理性を尊重する宗教として、教理の雄大深遠なることにおいて無比なる聲名をほしいまゝにしてゐるだけ、この葛藤は、さらに深刻であつた。

「河大なれば、源遠し」。雄大なる教理がこゝに構成せられたのは、それだけ深遠なる信仰體驗が、その下に湛えられてゐたからである。然しながら、かくして産み出されたる雄大なる教理建築は、その巨大なる重量を以て佛教の生命たる信仰部面をいちじるしく壓迫しはじめたのも是非なかつた。教理が巨大なれば、それだけ重壓もまた甚しかつた。信仰の代表たる淨土教に對する悲しむべき倒錯的解釋は、實はこゝに胚胎するのである。

それのみでない。佛教はまたその歴史において、極めて自由なる發展を心ゆくまで許した事において、無比なる特色をもつものである。そして、こゝに、世界宗教史上稀れに見る宗教の多面的發展の繪卷がくりひろげられた。おそらく、人間生活のあらゆる部面の限なき宗教化は、こゝに見る事ができるだらう。

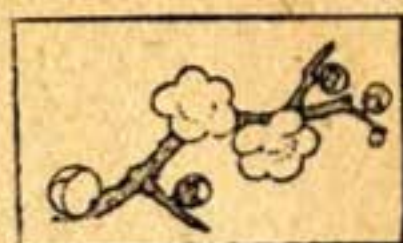
かゝる發展の流において、佛教を二重に構成せるその

信仰と教理との二面に重心を傾けつゝ次第に二つに分流して行つたのは悲しむべき事であつた。尤も、かゝる間にあつても、互に全く他を捨てたのではない。教理を重する流においても、宗教體驗の重要なことは知つていたし、信仰を重んずる側においても教理の精神はとり入れはしている。然し、この大いなる傾向は、時と共にいよいよ激しく、その方向において獨自の展開を遂げ、時代と共に、いよいよ、相ひ遠ざかつて行つたのは是非もない事であつた。

かくして、遂に、互に相似ざる二つの佛教——信仰の佛教と教理の佛教とが成立した。淨土教は、すなわち、前者の代表である。そうして、他の一方よりこれを見れば、他は、これを佛教としては肯ひかねるまでにあい隔つたのである。

淨土教に對する倒錯的誤解の原因はこゝに存する。すなわち、佛教の信仰的本流たる淨土教が、あたかも素姓さだかならぬ傍流のごとく見られるのは、たゞ遠く狹霧につゝまれたも一つの支流の岸に立つ者の、曇れる眼にのみ、かくは映るのである、

——さていよいよ時が來た。これから佛教の中に入つて、このことを調べやう。



詩と宗教

——晚翠の「暮鐘」に寄せて——

新間進一

祇園精舎の檐朽ちて

葦酒の香のみ高くとも

セント・ソヒヤの塔荒れて

福音俗に媚ぶるとも

聞けや夕の鐘のうち

靈鷲橄欖いにしへの

高き尊き法の聲。

これは、林吉土井晚翠の長詩「暮鐘」の一節であつて、その處女詩集「天地有情」の卷末に收められたものである。

「天地有情」は、晚翠の幾つかの詩集の中で、最もすぐれたもので、この詩は、その中でも一白眉とされ、「壓卷」とされる。かの諸葛孔明の事績を詠じた史詩「星落秋風五丈原」のボビュラーなものには及ばぬとしても、その内容からいつて、まさに晚翠詩の代表作と見做してよい。

全篇十七聯より成るこの詩は、始めに、ヴィクトル・ユーゴー（一八〇二—八五）

の「夕の鐘」と題する四行の詩を、序の代りに置いていることでも判るように、西歐の詩にヒントを得たことは、明らかで、また、實際にその影響の跡を、措辭の一々に指摘し得る。しかし、その想は、あくまで詩人晚翠のものに外ならない。作者にとつて夕べの鐘は、教會の窓より響き、畑を耕す農夫や野に働く少女に、ひとときの憩いと、祈りとをもたらすアンヂェラスの鐘であると同時に、杜の奥所深くより、洩れひびいてくる餘韻翳々たる古刹の梵鐘でもある。

「暮鐘」一篇の歌おうとする所は那邊に在るか。それは、本稿の冒頭に引いた一節を

珠數物語

後藤元祐

或る日、法然上人は弟子たちの末席に
いる阿波介にむかつて、

「往生の一大事を心がけている殊勝な
者よたくみなことをする」

とおほめの言葉をかけられた。彼の手首
には見なれぬ二連の珠數がかけられてあ
つた。彼は無智な陰陽師ではあつたが、
ふとした縁で法然上人の教を受けるよう
になつてからは、たゞ何とかしてひたす
らに念佛したい。これが唯一の念願とな
つた。そして考え出したのがこの二連の
珠數で、一連で念佛をとなえ、他の一連
でその數をとるといふ、現在淨土宗で用
いているものである。

珠數の歴史は非常に古い。凡そ五千年
前に榮えたという印度の古都モヘンジョ
ダローの遺跡から、儀式に用いたと思わ
れる珠數が出土している。記録の上で儀
式に珠數を用いたことを古く示している
のは、ジャイナ教の經典である。それは
カンチャニヤー（光・輝き）或いはガネ
チャ（數える人）などと呼ばれ、冥想

以てして明瞭といえよう。作者は、この世を「濁波を揚ぐる末の世」と觀じ、これに對して、夕べの鐘の音は無限永劫神の世を警しめ告ぐる一ものとしてゐる。

印度の國、須達長者の篤志を以て成つた釋尊說法の靈地祇園精舍も、また、東ローマ帝國のビザンチン式建築の粹をすぐつて建立されたセント・ソフィア寺院も、荒れ果ててしまつても（檐・塔という譬喩は、東洋・西洋兩建築の特色をうがつた言葉ではなからうか。）靈鷲山（耆闍崛山）・橄欖山に、法を説いた聖者の教は、夕べの鐘の中に籠つて、人々に無言の啓示を垂れている。これは、詩人の一片の感傷や美辭麗句ではなくて、嚴肅な事實であることに思いを致すべきではなからうか。

今次の戰爭に寺院という寺院の梵鐘は、すべて、「出陣」し、また、「應召」した。供出を免れたものも、戰禍に遭つて焼けた。こうして空しく埋れ果てた鐘の運命を憶うとき、わたくしの胸はいたむ。それは寺の子として育つたものの感傷であるかも知れない。しかし、在りし日の軍部の心ない仕業に對して大きないきどほりが胸を衝上げてくるのを抑えることは出来ない。たまたま、ラヂオに、美しい響きを傳える、古都や深山の大寺の梵鐘の美しい響きをきくときに、幾らかそのかなしみを忘れることの出来るのは、幸いである。

しかし、また翻つて思う。晩翠の歌つたように、この鐘の音に於いて、「靈鷲橄欖」にしへの高き尊き法の聲一が、現在の人々の耳にききとられてゐるであらうか。宗教復興の懸け聲ばかりは高いが、眞に人心を救済するだけの宗教は生れていない。爾光尊や、踊る宗教や、そういうものに蜚集する人々が一方に在り、またそれらに一顧を與えぬが、さりとて、正しい宗教をも顧みぬ多數の人々が一方に在る。日本の民衆は明らかに宗教を喪失してゐると思ふ。それでは一方既成教團は如何であらうか。お坊さんのお經より蓄音機のレコードのお經の方が、ずつと正確で、有難味があるという一氣違部落周游紀行一の著者の辛辣な諷刺もある意味では、肯定せねばならぬかも知れない。宗教は、受取るものの側でも、また與えるべき立場のものの側でも新しく出發し直すべきであらう。

わたくしは、こんな自己陶醉めいた感慨や、お説法じみた時論を並べる心算ではなかつた。詩人の作「暮鐘」一篇を、一つの宗教詩として鑑賞し、その中から宗教的なモメントを引き出してゐる筈であつた。今一度「暮鐘」の詩に立返つて考察してみよう。

に入る一方法として用いられた。印度教の中のシバ派の珠數は三十三玉、ヴィシユヌ派では、百八玉の珠數を使用している。印度の佛數では百八玉、四十玉、三十玉のもので、材料は金、銀、寶石類から菩提樹や獸骨のものまで多様である。西藏でも百八玉のものを使うが、朝鮮では更に卅と大玉二つとを加えたものが多く用いられている。マホメット教でも珠數を使い、三十三玉の三連、しかも聖地メッカの土で作つたものを尊ぶ。

西に渡つてヨーロッパ珠數が傳へられたのは十字軍遠征のとき土産ものとして持ち歸つたことから始まるようである。現在カトリックでは百五十玉のものを、ユダヤ教には三十二玉、九十九玉のものが見られる。珠數のことを歐洲ではロザリオ・シャブレ・ローゼンクランツなどと呼び、英詩人コールリッジはその詩に「鐘の音とともに、珠數玉を一つ一つ數え」と歌つてさへゐる。

珠數は宗教上の用具としてだけでなく歐洲ではお守りとか女性の裝身具としても使はれ、その材料もルビィ・サファイヤ・エメラルド・ダイヤなど仲々高價な

その歌い出しの一聯は、主題にふさわしい靜かな調子を以て始るが、以下の部分に於いて、種々の場所、例えば高樓や、城址や、草庵や、都大路や、海邊などを想定しそれらの至るところに、聞えてくるものこそ、鐘の音であるとする。それは、人生の明と暗と、樂みと悲しみとのあらゆる相を通じて變らぬものとする。詩人の空想はかくも美しい。

天使の群をかきわけて

昇りも行くか「無限」の座

鐘よ、光の門の戸に

何とかなれの叫ぶらむ

下界の暗は厚うして

聖者の憂絶えずとか

浮世の花は脆うして

詩人の涙涸れずとか

これなど、恰も一幅の泰西の宗教畫の世界を見る思いがする。

そして、詩人の思いは、行を重ね、聯を連ねるにつれて高潮してゆき、最後の數聯に至つて絶頂に達し、さきに述べたような一高き尊き法の聲一として、鐘の音が把握され、それは、過去に於いて、然かあつたばかりでなく、未來永劫にわたつてそうであらうと説いて、この長い詩を終るのである。

天の莊嚴 地の美麗

花かんばしく星てりて

一自然一のたくみ替らねど

わづらひ世々に絶えずして

理想の夢の消ゆるまは

たえずも響けとこしへに

地籟天籟身に兼ねる

ゆふ入相の鐘の聲。

なお、この詩の用語を仔細に検討してみると、「劫風」「無常」「閻浮」「濁世」「有情」等の佛教語が見出され、この詩の性格を見る上に、一つのキイとなると思われる。勿論、これは晩翠の漢語の使用と同じような動機で、英詩にラテン語を用いると同じよ

贅をこらしたものがあつた。パリやロンドンの大寺院附近には十三世紀頃までは珠數屋が軒を並べていた。

私たちが日頃手にする珠數の背後にもこの様な永い歴史性と廣い世界性がある。

大慈非心

(惠心鹿を追う)

比叡山横川の惠心院という寺に、今から約千年程昔の藤原時代に、惠心僧都という、日本で初めて淨土教についての著述「往生要集」を著した天台宗の高僧が住んでゐた。山の中のこととて色々の鳥や獸が澤山棲んでをり、特に鹿などは、惠心僧都の住居のすぐ傍まで來て遊んでゐた。處が、惠心は鹿が近くえよつて來るたびに、これを追い散らしてしまふ。これを見た一人の者がその無慈悲な仕打ちをなじると、僧都が答えていうには「いや、これが大慈悲ぢや。私がこうやつて追い散らさねば、鹿は段々と人に馴れて少しも恐れぬようになる。その果てには、本當に無慈悲な者の手に捕えられ殺ろされてしまふだらう。それがかあいそうだから、かうして追ひ拂つてやるのだ」と。經には佛心とは大慈悲心これなり、と説かれてあるが、佛心を實に行う

うに、古典的味いを漂わせるためであらうが、宗教的雰圍氣をねらつた、この作にはまことにふさわしいものであつた。

一幕鐘一篇は、鐘の音の持つ靈的な意味を強調した思想詩であつて、瞑想詩人としての特色をよく發揮した一篇であり、宗教詩とまではいえぬにしても、宗教的境地を志向し、且つ成功した作である。本格的に宗教の教義を宣揚し、または宗教的法悦境のありがたさを讃美する宗教詩も、勿論必要である。そして、それらを集成した宗教詩集の刊行も大いに存在の意義がある。しかし、この「一幕鐘」のような作も、一つの宗教詩の行き方ではないであらうか。

明治十五年の「新體詩抄」に始り、藤村の「行菜集」に開花し、藤村・晩翠の對立から、泣菫・有明の象徴詩に、そして白秋・露風へ、また光太郎・朔太郎へと、口語的な詩に移行してゆく、明治大正の詩史は、絢爛多彩な花園にもたとえるべきであらうか。或は向日葵の華麗を思わせる長大の史詩があり、或はつぼすみれの可憐を偲ばせる短唱の抒情詩がある。その中に於いて、狂い咲きの色鮮かな菊の大輪にも似て、突如出現した、いくつかの宗教詩集のあることを、われわれは、詩史を繙くとき、おのずから教えられる。然り、それらは、狂い咲きであつた。何故ならば、それらは前代の宗教文學から由來したものでなく、また明治大正の文學史の上にオーソドックスの位置を占めるべき筋合のものでもないのであるから。

それならば、どんな人々の、どんな詩集があるかというところ、明治の初めに、京都の同志社にキリスト教神學を學んだ、湯淺半月に、舊約聖書に取材した史詩「十二の石塚」(明治十八年)があり、また同じくキリスト教の側で、文庫派の一色醒川には、「頌榮」(明治三十九年)という作がある。

佛教の側では「迷の跡」(明治三十六年)を出した曉鳥敏を先ず推すべきであらう。近時とみに有名になつた東北の農村詩人、宮澤賢治の詩にも、法華經信仰よりする宗教的な作がある。こうした宗教詩集は、右に述べたように詩史の正統的存在ではないにしても、近代日本の宗教文學の發展の跡を見る上には、是非參照を要するものであらう。それらについては、また短歌や小説と共に、他日の考究にゆずることにして、ここには一見宗教詩とは思ひ難い詩人の一作品が、却つて宗教的な効果をもたらししていることの祕密を、解明したかつたのである。

——一九四八・一一——

には時にはこうした形で行わねばならぬこともある。

涅槃會の句

涅槃會や皺手合はする珠數の音 芭蕉
御涅槃やとりわけ花の十五日 一茶
泣きやうを盡き盡したり涅槃像 稻青
花嫁にちるときかす涅槃哉 文里

宇野圓空博士

新年號に「佛教の變革」につき御執筆頂いた文學博士宇野圓空先生は、狭心症のため去る一月一日急逝されました。先生は宗教民族學の權威であり永く東大教授、東洋文化研究所長とし學界教界の指導に當られ「マライシヤに於ける稻米儀禮の研究」で先年學士賞を受けられ「宗教學」その他の名著を遺して居られます最近近は國會の文教委員會顧問として我國今後の文教指導に心を寄せて居られました佛教界をはじめ廣く社會教學の上に痛惜にたえません。本誌への御執筆が絶筆となつたことを想ひ謹んで合掌申します。

庶務のお願い

新年號は豫想外の申込で増刷發送に年末年初をうれしい忙しさで送りました。しかし更に内容體裁を充實し發行を堅實にするため、出来るだけ豫約購讀のお申込を願います。振替(東京八二二八七番)を御利用下さい。

或る日のナホトカ

村 瀬 秀 雄

歸りつくと石の上にどかつと腰をおろす、埃を拂う、巻脚絆をゆつくりと解いてゆく。

これが三年間繰り返されてきた私の習慣であつた。といった脚絆をていねいにまいてゆく、そのわづかな時間が一日で一ばん楽しい解放されたとゆう實感がする時なのであつた。

「ほんとに今日は疲れたナー」

私は空腹をみつめるようにつぶやいた。

「やつぱり身體が弱つていゝんだネ」

となりで新聞紙をとりだしてマホルカ（粉煙草）をまいていた戦友が氣のりのしない返事をした。その日の勞役は、といつてそれほどのものだつたのではない。倉庫から船のそばまで約二百メートルをセメン袋をかついで運ぶ仕事、ぎつしり積まれた貨物の間を、蟻の行列が縫つてゆくように、目も鼻もまつ白になりながら私たちはそろそろと運んで行つた。いままでも苦しい仕事がよくあつた。けれど今日ほど疲れたのも珍しい。たしかに身

體が弱つて來ているのかな、とそつと自分の身體の中をみつめ廻す想いになつた。

二十五日とゆう長い旅、中央アジアからこゝまで貨車にゆられ通しのせいに違いない。

途中の驛にとまると、地上に降り立つ足もとがふらついた。食欲がなくなり、殘飯は子供や乞食たちにやつたりした。

「よくあきずに燕麥ばかり食つて來たね」

「もみがらばかりの糞をたれてか」

自嘲はするものゝ、燕麥は腹もちがよいところから私たちには、わるい食事ではなかつたのだ。乗船のために最後の集結地にきている私たちを、沖仲仕にかりだし、歸るまぎわまで使うやり方には腹が立つたが、それもけしとんでしまふ日が來た。戀するものに會つたように心はわくわくしていた。三軒もある波止場まで行つたおかげで、私たちは日本船をみたのだ。

苦しい時にはいつも險の裏にうかぶ日本

船、頭の中に何百遍、描いては消し、消しては描いたか知れない日本船。

その日本船をとらうと、今日、この眼で見たのだ。そのときの興奮——たれもがたゞ唸つてばかりいて口がきけなかつた。勞役から歸つたあとまで、その熱い胸のふるえがつゞいている。脚絆をとつてしまつても目にちらついているあの船の姿をそつとしておきたくて誰も起ち上ろうともしなかつた。

「きれいだったナー」

今日之で幾度くり返した言葉だったろう。

健康なものも歸れると分つてからは、あらゆることに歸國が利用されだした。自分の歸る旅費を積みたてるように私たちは言い渡された。澤山かせいだものから先に歸れるとゆうので、たれもが必死になつて働いた。それに伴うように勞働も強化された。それでも私たちは、自分で驚くほど懸命だつた。そおしてたゞはりつめた私たちの耳に、またいろいろなことが傳はつて行つた。

日本への歸還がおくれているのは、船と糧秣が足りないためだ。歸國の旅費を日本政府が支拂はないのは、われわれの歸還を日本が欲していないのだらう。歸還者はすぐその場

から失業の嵐の中に放り出されてしまう。

日本を、敗戦の内地を想像だに出来ない私たちは、こおしたことが間違いだとも言い切れない。氣持だつた。内地の窮狀、そおには違いない日本政府に誠意がない。そおかしら。事實私たちが乗船地についてから、十日になるのに船は來なかつた。噂はともかく、船と糧秣の不足はまちがいないことだと思ふ様になつて來た。それほど困つてゐる内地は、どんなだろうかと心を痛めた。想像しては心を暗くした。はるか海の向うにいる親や妻や、子供たちを想つて、たゞ生きてさえてくれたらと、それだけを念じた。いま私たちはこおして船を待つてゐる。いま暫らくだ。苦しいだろうが無事でいてくれと祈つた。もはやこれ以上のことを望まなくなつてゐた。

まだこゝの乗船地え來ない前でこそ、内地え歸つたら何はなくとも、旨い飯を食ひ、酒ものむのだと自分たちや、また周圍の生活をくらべて反撥的に内地の樂しさを夢みていたが、もうそれも諦めなくてはと思ひもした。

こおした氣持で働いて來たところえ、突然日本船が入つてきたのだ、美しかつた。港の中のどの船よりも美しかつた。船首ではまっ

白な制服制帽を着た船員が、たゞ一人、指示をしてゐるだけだつた。私たちはたゞうつとりと、この高級船員の姿を眺めていた。船が來始めさえすれば、當分はつゞいて入つて來ることを知つてゐた私たちは、やがてあのタラップを自分たちが踏む日を想つて目をこらしてみつめていた。

やがて來船が終ると、すぐ船は港を離れていつた。船が港にいたのはごく僅かの時間であつたが、なつかしい内地の空氣にふれたように船をいつまでも見送つてゐた。私たちはこの後味を、そつと大事に抱いて收容所に歸つて來たのであつた。どんな噂にもどんな話にも黙々として、この日の想ひを歸る日までじつと持ちつゞけて來たのであつた。

遣送船

町田修

家財道具から身の廻り品まで、賣れるものは賣つて現金に換えるのが、手つ取り早い方法なので、在留邦人の「立ち賣り」が街にはらんしている。買手は容赦なく値を叩いた。私にはもう立賣りも出來なかつた。ぎりぎり

のところ身體を晒けて轉々と、ありとある職をみつけてはその日の生活を支えることが精一杯になつた。生きるとゆうこと、それが歸るとゆうことより前の問題だつた。春が過ぎ夏を送り、大連は戦後二度目の冬を迎えた。鉛色の空に包まれて舊ヤマトホテルの屋上に立てられた赤旗は、膚をつきさす様な北風にはためき、とおく埠頭のアンテナが冬空につきさゝつた針の様にみえる。その鐵柱の下の收容所、そこに收容された北滿からの避難者の人たちが遣送されてゆくのを、喜び合つて見送つた私たちは殘留の想いで胸を冷たくした。

待望の遣送船入港が通達される日が來た。歸れる、歸れるんだ。私たちは浮足だつた。それまで、それまでは頑張ろう、誰もがこんな言葉でしかこの喜びを現はすことが出來なかつた。寒さも、苦しさも、淋しさも、もう何んでもなくなつた。夢を夢でなくはつきり擱んだ嬉しさ、外地での最も喜ばしいそして最も貧しい新年を送つた。

船が入る、もう歸れる、幾度かこの言葉に迷はされて來た。市内の物價に、港の船に少しでも變動があると、すぐそれを送還に結び

つけて喜んだりまた悲しんだりしたがいまは夢が現實となつて身近く迫つた。そして永年住みなれた町、再びは訪ねることも出来ないだらうこの町への愛着がうつすらと心を包んだ。やたらに町内を歩き廻つた。見なれた浪速町の雑踏にも新しさを感し、歩きなれた小路の並木にも去るに忍びぬ美しさを感じた。そして歸ろうとする日本を想つた。しかしそれは私たちには全く未見の世界でもあつた。

パースに繋留された灰色の戦時規格の船體は敗れ疲れた故國の姿なのかもしれない。かつては五色のテープや輕快なマーチに出帆の華やぎと淡い離愁とで彩られたベランダも、いまはたゞ灰色の遺送者の群れにうねりもり上つている。ソ聯運送將校の下船とともにラッブは外され、船い夕闇の這ひよつた水を騒がせてゆるぎ出した。船一杯に起つたどよめき、叫び、群集の騒然とした唸りはやがて一連の調子をもつて大合唱え變つていつた。

船上のばよめきをよそに私は身内に不安が忍び上つてくるのを感じた。今まで生命を支えてきた夢、造船の夢が、もう夢でなくなつた。いま歸ろうとする日本は未知の世界だつた。記憶に浮ぶ日本は消えているだらう。私

は何に頼つて何を裏付けに之からの夢を描いたらよいのか。しんとはね返つた空に冷たく星が見える。その空高く無電塔の巨大な赤い星——私は夢を失つた空を覗く様に眼をこらした。その視界に赤い星は小さくなつて行つた。

◇讀者の聲◇

淨土編集部先生がお異動になられ私は大なる期待を抱いております。毎號届くのを待ちわびて拜讀させて頂き、苦しいこのインフレの荒波の中にも、光明の彼岸を求めております。主人は戦死、三兒を残されましたが、淨土宗教會を守つて有髪のまゝにて法務に精進して居ります。之みな信仰のお陰と感謝し益々信じ、求め、深く明るくと念じて居ります。このたびの「淨土」こそ私にはなくてはならぬ無二の寶なのです。どうぞ期待にそふよう御努力下さい。(延岡市・高久欣子)

御苦辛の程お察しいたします。お互信仰に深く生きませう。編集も努力します。(係)
今度の淨土は一寸變つていて誠に結構でした。むさばるるよう讀ませて頂きました。今後益々よい本を出版されるよう、少しでも教化に活用したいと存じます。(大阪・安養寺)

淨土だけは創刊から愛讀して居ります。困難な經濟下に、再生して下さつたことを厚く御禮申し上げます。昔乍らの貧寺でも、淨土によつて上菩提を求め、淨土によつて下衆生を化益させて頂いています。(敦賀・誓蓮院)
内容も短い乍ら充實し誠によい雑誌と存じます。唯希望を言えば表紙に佛教に關係ある色刷畫を加えてもつと大衆向きにしたら一層よいと思ひます。(埼玉・大長寺)

淨土一ヶ年分誌代送金いたしました。しばらく休まれていたので廢刊かと心配しましたが、復活した「淨土」のすこやかな大飛躍を願ひたい。がんばれ。(仙臺市・中村眞瑞)

それぞれの會友方から本誌の再生を喜んで頂いて我々も心強いです。淨土を通じて何卒地方教化の展開をお願いします。編集えの御希望はどしどしお寄せ下さい。(係)

新年號の「佛教と双六」大いに共感。小僧時代私も正月には深更までヤツタものです。その頃のは振出しが南閻浮提、上は十信十位など下は奈落廻り。賽は貧瞋痴戒定慧の六角型。懐しい想ひ出です。(埼玉・中村了達)

賭やカルタの記述は興味がある。賭は現代思想の全面に問題性をもつてゐる。淨土の矢つぎ早やの進出は新年號でついに一流のレベルを示した。更に努力を望む。(東京・T生)
御愛讀と共に廣く會友をお勧め下さい。(係)

芝園だより

◇新年號の好評絶大、讀者の聲のとおり、そこで息もつかず充實した本號を送る。結城畫伯は誰も知る日本畫壇の重鎮、藝術院會員、彩管と佛心と一枚の悟境を今後も本誌のためお書き下さいます。

◇吉田先生の心に泌みる隨想。異國の丘を想ひ、引揚船を彼地にまつ心を集め。殊に會ての本誌同人村瀬氏には刻明な體驗録を頂いたがその一部を以て更にその奥に深刻な實情あるを察しられたい。

◇眞野先生の第二講、熟讀された。新聞氏は國文學界の新進學者とくに宗教文學に異色ある研究著書をもつて期待されている方。二月の風はきびしくとも春を想つて精進しよう。本誌が届く頃は選舉も終つて日本の次の一步が始まる。明るい再建を祈る。(藤田)

◎街角で、店先で、車の中で、いやどうもサツマ芋の配給攻めは閉口です、いやはや、いやな世の中になりましたネ——。

こんなアイサツが我々の日常にしみついてもう彼此十年近くなる。まだまだ何年かはこの調子で過ぎねばならぬとしても、凡そこの流儀のアイサツは不健康でイチ／＼し切つてゐる。

「やーいい陽氣ですね、」在りし日の健やかな、ゆとりのあるアイサツをわれわれはすっかり忘れてしまつてゐる。鹿つめらしく、いかに高い教養や文化にあこがれても些細な日常のアイサツを、先ず、健やかなゆとりをもつて、交はす様になることが望ましい。

——とかく人の世は住みにくいとどこへ越しても住みにくいと悟つた時、詩が生れて、繪が出来る。今にして、この漱石の言葉が、しみじみ味はれる。(吉田)

◇まだ町では追羽根、風あげの最中、われわれは二月號の編集、たのしい錯覺ではあるが、之からがハンデキャップなしの眞劍勝負、◇政治家の墮落が云々されてるが

日本の政治家ほど宗教に無關心なものもない。クリスマスツリーを季節的裝飾と一言で片附ける勇氣はまさに蠻勇、またぞろ擔ぎ出して飾る方は蒙昧、ともに度し難い。

◎だが反省しなければならぬ。季節の飾りものとする無關心さと同時に、飾りものになり下つたその墮落さと、この二つ、考えねばなるまい。信仰は生きてなければ意味がない。裝飾はどんなにすばらしくてもその中には信仰はない。況やデパートの季節的裝飾に於ておや。

◎と云つて生きてるばかりも亦困る。踊る宗教、觀音教、足ばかりで頭を落してしまつたのが、宗教だとゆう危險、多分にある。何れにせよ、保守反動が擬裝する。我々は別に大きな道をゆく。

◎カトリックの農漁村傳道の素晴らしさ。われわれも大いに頑張らねばならない。しかも徒手空拳あるのみのわれわれ、一層の献身を必要とする。(竹中)

「浄土」 二月號

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和廿三年 一月二十日印刷

昭和廿四年 二月一日發行

(定價拾圓)

東京都港區芝公園五ノ一〇

編輯兼 眞野 正 順
發行人

印刷人 春山治部左衛門
東京都千代田區神田保町三ノ十

印刷所 共立社印刷所
東京都千代田區神田保町三ノ十

配給元

東京都千代田區淺路町二ノ九

日本出版配給株式會社

東京都港區芝公園五ノ一〇

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費 概算金百五十圓
一ヶ年 (送料共)

明るい時代は服装から

補修更生は念入りに

大學高專服の御新調は

佐々木洋服店え

文京區音羽六丁目廿二

電九段(33)1647

大學高專服は是非

お客様本位の

日の出洋服店

豊島區西巢鴨四丁目

電大塚二五〇七番

補修更生は迅速丁寧に